右一首、守○中越大伴宿禰家持作之、

〔古今和歌集三夏〕うづきにさけるさくらをみてよめる　紀としさだ○略歌

〔秘藏抄上〕十二月異名　四月卯月○中略　このはとり

〔莫傳抄〕十二月異名　卯花月　夏初月四月

〔藏玉和謌集〕十二月異名○中略　四卯花時鳥　卯花月　得鳥羽月　花殘月

〔伊呂波字類抄左天象〕五月○サツキ律中蕤賓

〔八雲御抄三上時節〕五月　さつき

〔下學集上時節〕蕤賓五月　梅月五月、又云送梅月、此月送盡梅子故云爾也、　星火五月　東井五月　皐月

〔二中歷五歳時〕月倭名　五月俗説云、五月農事有時、耕種尤盛、採早苗營播植、故此月爲早苗月、今所謂サツキハ、是サナヘヅキノ訛也、

〔奥義抄上末物異名〕五月　田うふることさかりなるゆゑに、さなへ月といふをあやまれり、

〔東雅一天文〕サツキといふ事は、早苗とる月なれば、早苗月といひしを、サツキとはいふ也といふ説もまたあるべき、舊事記に見えし所は前に云るせし事のごとし、サナヘといふもサバヘといふがごとくに、此月の名によりてこそいひしことばなるべけれ、

〔倭訓栞前編十佐〕さつき　五月をいふ、早苗月也といへれど、幸月なるべし、狩は五月を主とす、

〔古今要覽稿時令〕さつき五月　さつきは五月の和名なり、日本書紀神武紀、萬葉集夏雜歌等にみえたり、これよりいとふるく神代に、五月の文字みえたるは、いはゆる畫如五月蠅而沸騰之云々と、日本書紀神代卷　みえしぞ始なる、さてさばへなすわきあがるとみえしは、此月にかぎりて蠅多く群がれる事をいへるならん、さて五月蠅、此云左魔陪上同と、みえたるをもて考ふるに、五月の二字を以て、サと訓ずるは、五十鈴姫命と上同見えたる、五十の二字、イといふにおなじく、二字一言なり、しかれば五月をサとのみもいふべけれど、月の名にとなふる故に、さつきと訓たり、さは小なる義なり、